

第268回松本歯科大学大学院セミナー

日 時: 2012年10月30日(火) 17時30分~19時

場 所: 創立30周年記念棟大議室「常念岳」

演 者: 佐々木 敏 氏 (東京大学大学院医学系研究科・教授)

タイトル: 歯科研究と栄養疫学研究の出会い

— BDHQを歯科研究に活かすための理論と技術

口は食べ物の入口であり、食べ物は口に入れられ、噛まれ、飲み込まれないと(実際にはもっと複雑であるが)、摂取されたことにはならず、健康への寄与も害もない。したがって、口腔の健康を守り、摂食嚥下機能の健全な保持を目的とする歯科医学は食べ物を食べ物たらしめている医学・医療である。たとえば、義歯の状態や本数が、いくつかの抗酸化栄養素(ビタミンC、カロテノイド類、ビタミンEなど)を豊富に含む食品(野菜、果物)の摂取量と有意な関連を示すことや、その結果として、それら栄養素の血中濃度とも相関すること、それがその後の歯周病の発生に有意に関連していることなどが日米両国から報告されている。また、若年女性ではあるが、噛む力を要するいわゆる硬い食べ物をたくさん摂取している人ほど肥満度が低く、腹囲が細いという報告もある。前者は栄養生化学に、後者は栄養生理学に属する知見であるが、いずれも実験室で行われた実験ではなく、実世界のなかでの観察によって明らかにされた「栄養疫学」に属する研究である。一方、ショ糖の過剰摂取とう歯との関連はすでに明らかであるが、ショ糖摂取量とう歯の発生率との関連に関する疫学研究はそれほど多くない。ほとんどの研究が、甘味食品や甘味飲料の摂取頻度といったレベルに留まっている。栄養疫学研究では、摂取した食品名とその重量と、食品成分表に記載されている成分値を用いて、各栄養素の摂取量を対象者ごとに推定するが、日本食品標準成分表にはショ糖の成分値が記載されていない。そのため、ショ糖摂取量の影響に関する栄養疫学研究はわが国ではほとんど試みられていない。これは、栄養疫学を支える基礎学問のひとつである食品学の問題である。歯科医学が特に予防の観点から社会に貢献できるとすれば、そのうちのいくらかは栄養疫学を介したものであろう。これは、歯科医学と栄養疫学が協力して研究を行なう必要性を示している。しかしながら、栄養疫学の基礎となる栄養学も疫学も歯科医学の教育のなかではじゅうぶんではないと聞いている。逆もまた真なりであり、栄養教育のなかでも疫学教育のなかでも(残念ながら両方もわが国では極めて低調であるが)、歯科疫学が話題に上がることは最近まで乏しかった。しかしながら、食べ物は口を通じて体内に入ることを考えれば、両分野の協力は不可欠であり、かつ、極めて自然なことは自明であろう。

略歴 1981年 京都大学工学部卒業, 1989年 大阪大学医学部卒業

1994年 医学博士(大阪大学), 1994年 医学博士(ルーベン大学大学院医学研究科)

現職 東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻 社会予防疫学分野 教授

- 1) Sasaki S, et al. Self-reported rate of eating correlates with body mass index in 18-y-old Japanese women. *Int J Obes Relat Metab Disord* 2003;27:1405-10
- 2) 佐々木 敏, わかりやすいEBNと栄養疫学 同文書院, 2005

担当: 健康増進口腔科学講座 牧 茂